



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	農民的農業の主体的対応と展望：別海マイペース酪農交流会を事例に(1995年度秋季大会シンポジウム「農業再編と主体的対応」)
Author(s)	木村，純
Citation	北海道農業経済研究，5(2)，24-30
Issue Date	1996-05-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63093
Type	journal article
File Information	KJ00009064964.pdf



[報 告] 1995年度秋季大会シンポジウム

農民的農業の主体的対応と展望

－別海マイペース酪農交流会を事例に－

木 村 純 *

I. 課題

1992年の農水省の「新しい食料・農業・農村政策の方向」以降の農業政策では、農業経営の主体（担い手）として認知されているのは、法人組織や企業体であり、家族農民経営の存在が否定されているが、その目指す方向に対抗して農政を批判的に克服し、農業生産技術や農業経営、農民家族の健康と生活等を含む農民的農業の発展の模索が行われ、政策自体を改変する農民の主体的力量形成の芽を現実の動向の中に見いだすことができる。

家族農民経営を否定しようとする政策的な方向に対して実践的批判と農民的農業の発展の方向を示す事例として根釧・別海町の「マイペース酪農」とそれを支えてきた学習運動について報告をする。別海町の酪農民の学習運動は、1970年代の「別海労農学習会」として始まったが、今日では「マイペース酪農交流会」、「別海酪農の未来を考える学習会」に発展している。それがいかなる経過をたどりながら発展し、従来の酪農民の学習運動と比較してどのような特徴をもっているのか、マイペース酪農交流会には、根釧農業試験場の研究員、獣医師や酪農ヘルパーの参加が多いことが一つの特徴となっているが、その参加の背景と意義も検討

しながら、農民的農業の主体的対応と展望について述べたい。

II. 別海町の「マイペース酪農」の実践の特徴

根釧・別海町を中心とする「マイペース酪農」の実践は、「マイペース酪農交流会」を中心とする酪農民の継続的な学習活動と一体で進められていることに特徴がある。その学習会で酪農民自身が行っている自分たちの経営収支と新酪農村の酪農経営との比較では、搾乳牛40頭前後で大規模化を追求せずに高い所得率を上げていることが明らかである。「マイペース酪農交流会」の事務局を一貫して担当している高橋昭男獣医は、「マイペース酪農」について、次のように整理している。「1. 農政その他にあまりふりまわされないで自分の考えでつくる農業 2. その家族の条件に合った、人の生き方にあった家族農業 3. 余分なエネルギーを省き、生産構造を簡素化した農業 4. 自然・風土に合った農業 5. その農場の中での物質循環が乱れ、外に流出しない農業、特別のことではありません。どこの地方にもある、いままで農民がやってきた、農民が考えている普通の家族農業のことです。では、なぜ『マイペース』

* 北海道大学高等教育機能開発総合センター

と言わなければならないのか、北海道の農業は全て開発政策によって人が移住してきて、政策が示す方法で指定された作物を大量に生産する農業が行われてきました。これからは、その土地に合った農業を自主的主体的に考え、つくっていくという意味が込められています」(マイペース酪農交流会『交流会の案内』1994年5月18日)。

この整理にも示されている、「マイペース酪農」の特徴を整理するならば、次の諸点を指摘することが出来る。

(1) 酪農政策の実験場として絶えず位置づけられてきた別海町において、1970年代の新酪農村建設事業の入植農家が巨大な借金に喘ぐなかで、「政策のペースに巻き込まれないで家族経営として自分の間尺に合った経営を目指す」という「近代化」政策に対する批判的態度がその根底にあること。

(2) 「自分の間尺にあった経営」の起点を家族の生活に置き、人間らしい生き方を何よりも追求する家族農業を目指していることである。この結果として、家族の生活と健康を犠牲にする過大な大規模化を抑制し、根室地域の平均搾乳牛頭数が60頭を超えているのに対し、「マイペース酪農」を実践する農家では40頭前後に止められている。

(3) 人に無理をかけないということは、家畜・土地にも無理をかけないということにつながり、具体的には1頭当たり乳量を適量(年間6千〜7千キロリットル)に抑えて乳牛に無理をかけず、様々な疾患を防ぐとともに、いたずらに化学肥料を多投して飼料作物の反収を引き上げることをしないということである。こうした実践の基礎には牛—土—草の関連構造についての認識の発展が基礎となっている。

(4) このような自然循環にかなった農業は経済的にも大規模経営と比べても格段に所得率が高い。北海道の酪農経営の平均的所得率は1989年に34.1%であったが、1993年には19.1%まで落ち込んでいるので(農水省『農家経済調査』)、その数値を

10〜20%も上回っている。

(5) 個別農家の以上のような生産と生活における実践が地域社会を介在してグローバルな自然・環境問題や経済問題の認識と結合していることである。例えば、次のような話し合いが既に行われている。「(西別川の汚濁問題、西別川の取水計画問題について) 川下の汚れは、川を取り巻く環境が悪化しているからです。別海の場合、川を取り巻く環境とは酪農地のことです。酪農がここまで進展してきて、いまや酪農・牛飼いのやり方が問われています。化学肥料を大量に投入して牧草を多収すると、草地は砂漠化し、よい草もできなくなりますし、大量にでてくる糞尿を粗末に扱うと川を汚すことにもなりますし、それは自分の土地から富が流出していることであります。富を流出させているということは儲かる酪農ではないということです」(『交流会の案内』1992年7月29日)。さらに、次のような話題も議論されている。「今多頭飼育の酪農家では、牛の糞尿の処理に困り、野積みにして公害環境汚染の原因になっている。アメリカでは穀物の輸出に伴って農地が痩せているが、これは自然循環の破壊が個別経営の破壊であると同時に地球的規模の問題(農産物の輸入)である」。

(6) これらの実践は以下に述べるような酪農民の持続的な学習活動に支えられ、広がってきたことである。

Ⅲ. 別海町の酪農民の学習運動の発展

1. 別海労働学習会から別海酪農の未来を考える集会へ

1970年代に入り、別海町では、酪農「近代化」政策が、第2次構造改善事業や搾乳牛50頭経営の移転入植を図る「新酪農村」建設として進められた。政策主導による酪農経営の大規模化は、負債

の増大、経営の悪化、過重労働による酪農民の健康破壊、挙家離農の激発、過疎化の進展等の諸矛盾に逢着し、酪農政策が地域の再編成政策として展開すると同時に酪農問題が地域問題となっていた。別海労農学習会は、教師、農業改良普及員、獣医師、保健婦等地域の労働者が酪農民と協同してこうした酪農政策に対抗する方向を模索することをひとつの目的として発足した。したがって当初から、酪農「近代化」政策を批判・克服して、農民経営と地域農業を発展させるという課題を内包していた。別海労農学習会は1971年から始まり、70年代に5回開催されたが、第1～2回は、「政策主導の大規模化は必ずしも所得の向上を進めるものではない」ことが、組勘等を利用した自分たちの経営分析を通じて明らかにされた。このような調査学習を通じて酪農「近代化」政策の批判としての政策学習と経営学習の結合が図られた。第3～4回の学習では、おりからの「新酪農村」建設計画、構造改善事業にどのように対応していくか、その一環として進められ、小規模酪農家の離農にもつながりかねないバルククーラー導入にどう具体的に対応していくかが検討され、酪農「近代化」政策の意図する地域再編に対応する方向が示された。そのために実態調査による経営分析に基づく経営学習が行われ、階層による要求の違いが明確にされた。バルククーラーへの対応などを検討することを通じて個々の酪農経営の条件に照らして酪農政策に対抗していくこと、すなわち個別農家の発展を基軸にしながら、集団的に対応していく方向が明らかにされた。しかし、労農学習会の段階では、まだ政策主導の大型化に対置しうる酪農経営の具体的なあり方が必ずしも明確にされてはいなかったが、回を重ねるごとに酪農民とともに農協労働者、獣医師、改良普及員等の参加によって、それを明らかにしていく条件が作られていったとみることが出来る。

別海労農学習会は、酪農「近代化」政策の進展、

町内の各地域ごとの生産力格差の顕在化、矛盾の発現の違い等が明確化し、それぞれの地域での農協（その後、農協合併が進展していくが、当時別海町には6農協があった）を単位とする集団的な対応の必要性が明らかになり、労農学習会そのものが全町集会だけではなく、地域ごとの小集会をもつような学習運動として再編成されることが必要になっていた。酪農経営研究集会は別海町西春別地域（とくに当時泉川開拓農協があった泉川地区を中心としていた）で、農民組合、農協労働者、獣医師等の学習主体の形成を背景に、地域小集会として発足した側面をもっていたが、これは西春別地域、とくに泉川地区で活動する継続的な酪農民の学習組織である酪農経営技術研究会の活動を基礎に開催された。最初は、西春別農協、西春別開拓農協、泉川開拓農協の3農協の合併への対応の方向を明らかにすることを目的としていた。

そこでは、泉川開拓農協のもとで、構造改善事業を実施せず、小規模酪農家を離農させないことを基本に運営されてきたこの地区の地域酪農—酪農「近代化」政策に対立する方向として必ずしも自覚的に取り組まれていたわけではないが、借金が少なく、小規模ながら安定的な経営が多い地域酪農のあり方があらためて「マイペース酪農」として位置づけられることになった。このような経営学習の発展は、農民組合の地域（集落）に密着した活動によって支えられていたものであった。この、いわば「マイペース酪農」の意義を集団的に確認しあい、別海町及び根釧全域に普及する経営学習が課題となっていた。農民たちの反対にもかかわらず農協合併が強行されるが、農協合併によって、泉川地区は西春別農協の1地区となって、学習会の中心メンバーが西春別農協の理事や監事になる中でむしろ泉川地区の地域酪農のあり方を農協管内全域に広げていく課題に取り組んでいくことになった。この農協合併に反対して、泉川の地域酪農の意義を確認していったことが、そ

の後のマイペース酪農交流会の成立・発展の重要な基礎的条件になったと考えることができる。酪農経営技術研究会の学習は、参加農家の自宅や庭先、牛舎を会場に、獣医師を助言者として、「2本立て飼料給与法」を中心に行われた。これは、粗飼料（牧草）と濃厚飼料（購入飼料）の組合せにより、乳牛の健康を土台にして1頭当たりの乳量を高めようという飼料給与方法である。この学習には、たんに乳牛飼養管理技術が個別に採り上げられるのではなく、いかに良質の粗飼料を作るか、そのために良い土づくりを堆肥の生産を基礎にいかに行うかが学習され、土－牧草－乳牛の循環を踏まえた生産力の体系的認識が形成されるようになっていった。しかし、もともと購入飼料を多給する都府県酪農を基礎にした技術であったために、集約的な飼養管理をするとしながらも結局は購入飼料を多給して規模拡大を進める結果となり、政策主導の規模拡大路線に対抗する、人間の健康と乳牛の健康を同時に守り、安定した酪農経営を実現することには必ずしもつながらなかった。労農学習会に参加した酪農民の後継者が既に学習会の中心になっていたが、そうした学習を自ら進めながら、就農や結婚を契機に制度資金を借り入れて規模拡大のための投資をするような酪農経営も少なくなかった。彼ら自身が規模拡大の路線に少しずつ巻き込まれていったのである。しかし、ここでは、農民的酪農経営の典型事例として注目される酪農家を見学したり、牧草サイレージの出来具合や乳牛の健康状態に参加した農家の牛舎を回って討論する学習が実施され、現在のマイペース酪農交流会への発展につながる学習方法の開発が行われた。また、結婚して二人で酪農に取り組み始めた若い夫婦の間で過重労働をどのように解決していくかが話し合われ、その解決が共同の課題となっていった。子育てに取り組む過程で、生活を大切にしたいという思いから、それはますます重要な課題と捉えられるようになっていった。

2. 酪農民の学習の新たな発展

1980年代後半になると、貿易自由化の動向等酪農をめぐる政策的条件はさらに厳しいものとなり、乳価低迷下で予定した借金返済が出来ず「新酪農村」に移転入植した酪農家が負債の累積に苦しむ中で、86年から始まった別海酪農の未来を考える集会は、それまで地域小集会として分化していた学習組織を再び全町集会として再建したものであったが、内容的には、依然として「マイペース酪農」の模索－政策主導の方向とは異なる酪農経営のあり方の追求－が続いていた。第6回学習会の講演者として隣接する中標津町の酪農家・三友盛行氏を迎えたが、この三友氏の酪農経営の考え方を学ぶこと、またそれを重要な学習内容として位置づけたことが、マイペース酪農交流会の開催の契機となり、酪農政策に対抗する酪農経営のあり方が次第に具体的に明らかにされていくことになった。出合いの当時の三友氏の酪農について、高橋獣医は次のように述べている。「三友さんは農業の根本について主張します。自然の循環の中で農業は営まれるべきであり、主役は自然、人間は脇役なのだ。太陽から来るエネルギーを受けとめる装置なのだから、土地は収奪してはならない。一時的に収量が多くても、そのために他からもってきて投入する肥料、その他のエネルギーはエスカレートするばかり。根釧酪農では1町歩1頭が原則で、得られる堆肥は完熟させて返す。こうした農業哲学を規範として実践されている三友農場の営農は、草地48ha、成牛換算頭数48、乳量220トン、収入合計約2700万円、支出合計約900万円、利益率68%」（高橋昭夫「牛飼いで生きぬくための学びあい」『月刊社会教育』1990年6月号）。三友氏の経営の特徴は、現象的には放牧を基本としながら、完熟堆肥の施肥を行い、頭数を増やさないというものだが、「農業とは、せいぜい地下10cmから30cmの収支を如何に合わすかというものであるに

もかわらず、現代農業は地下何万mの化石エネルギーを使って収支を合わせているに過ぎない。また酪農は生産量の拡大が容易であるから、一般には生産量の拡大が経営の安定につながるという発想が強いが、そのような技術観は牛が反芻動物であることを忘れ、単胃化している。草地の維持管理の方法を知らない農家は草地更新も単年でいい、飼料給与も昼間は『もったいない』と言って餌がない農家も多い。牛も失業状態であるし、草も土も失業状態にあるのが現代の酪農業である」というような生産力の体系的・循環的認識や「数字にあらわれた経済指標を達成するための労働ではなく、自らの人生を支えることができるような労働が求められているのであり、人生を支えることができる草が良い草である」という労働に対する独自の評価基準にみられるその明確な経営理念にある。高橋獣医によれば、三友氏との出会いは「農民が講師に登場したことで、学習会は質的に大きく成長できました。学習会に参加した人たちは、知識を得ただけに終わらせず、自ら考え、日々の農作業に応用していきましました」という大きな変化をもたらした。それは、講師が酪農民であったこともあるが、参加者がそれまでの自分の実践と重ね合わせて理解できるような普遍性を三友氏の実践の理念がもっていたことを示すものであろう。

Ⅳ．現段階の酪農民の学習の意義と特徴

以上のように、「この実践的な学びを進めていくためには、年1回の学習会では足りない。そこで、毎月1回定例の『マイペース酪農交流会』が、(別海酪農の未来を考える集会の)第6回の直後から始められました」(高橋獣医)。こうして酪農民の学習はその後のマイペース酪農交流会の広がりもあり、内容的には三層の構造をもつ学習運動として発展していった。それは、①西春別地区以外のマイペース酪農交流会であり、小人数だが、

農家の居間で自由な経験交流が進められる溜まり場のような位置づけの学習の場、②西春別地区の交流会は商工会館を会場にしており、規模も大きく(20~30名)、各地区の交流会の中心になっている。別海町外の参加者がある他に「異業種」の獣医師や試験研究機関の研究員、教員、酪農ヘルパー等の参加もある。ここでは1か月の経験を反省し、発言する内容を事前に考えてくる農民が少なくない。準備した発言を契機に討論が盛り上がり、「塾のように勉強になる場」として評価されている。③別海酪農の未来を考える集会は、この交流会の開催により、その位置づけをかえたように思われる。100~150名の参加があり、町外からの参加者も少なくないが、交流会で重ねられた学習の経験を分析・検証する場として、経営実績や技術改善の成果がパソコンの駆使により数値化され、客観的に検討される。このように農民自身が自らの経営を客観化し語ることの意義は大きい。また、時々の政策動向についての研究者の講演も重要な内容となっている。これらの学習は次のような特徴をもっている。第1に、毎月開かれるマイペース酪農交流会でとくに目立つが、根釧農業試験場の若い研究員、共済組合の獣医師、酪農ヘルパーの青年たちの参加が多いことである。酪農ヘルパーには女性もいる。マイペース酪農交流会は自己紹介(近況紹介)を中心にして、参加者全員が発言するというやり方で進められるが、彼ら自身が「マイペース酪農」の実践にどう関わるか、自分自身の仕事の役割も含めて考え、発言するという率直な姿勢が示される。自分自身の農業に関わる仕事の内実を語るということは労農学習会の段階ではなかったことである。彼らは専門的な立場から発言することもあれば、教育問題や環境問題等の「異業種」のことを語ることもある。また、それぞれが関わっている、例えば自然環境を保護する運動のことを話すこともあれば、サケ科学館の学芸員がサケの生態や博物館の教育事業の体験

を話すこともある。その意味では交流会は農民の経営問題・生活問題の交流にとどまらず彼らの実践や体験を交流する場にもなっているのである。また、このような専門家や知識人とともに様々な問題について議論が出来るまでに酪農民の問題意識が普遍的な性格をもつようになったことをも示しており、酪農民の主体形成の進展がうかがえるのである。

第2に、酪農民が自分たちの現状について分析能力を高めていることである。パソコンを活用して、「マイペース酪農」を実践しているものとそうでないものの経営収支の比較分析を図表化して報告するのも彼ら自身であり、こうした検討の成果に基づいて、彼らが自分たちの学習や経営実践に確信を深めている。ある農民によれば「酪農に関する情報が入ってくると知らず知らずのうちに『規模を大きくするのが当たり前』という意識が出てくる。自分の経営でいいというのは余程『偏屈な人』で、普通の人は流されて規模が大きくなるとフリーストールも仕方ないなと自分の経営に対する考え方が揺らいでくる」、それを「いろいろな人の話しを聞いて確かめているところがあるんじゃないか」と述べている。メーカーや行政主導の大規模化に関わる経営・技術情報が大量にもたらされる中での交流会のもつ意義が語られている。

第3に、酪農家の女性が夫婦で参加していることである。そして皆が積極的に発言することである。自己紹介の際にも、まず酪農家の女性が自己紹介し、自分の夫を紹介することも珍しくない。こうした特徴は、未来を考える集会にも共通している。男性の経営主の話しがとすると恰好をつける建前論になりがちなのに対し、女性がその舞台裏を打ち明けて、酪農家の実態を率直に本音で話すことにつながり、学習会の雰囲気をも明るくしている。これは、女性が酪農労働の重要な担い手であるだけでなく、経営に対等に参加するようになっていることを基礎にしており、交流会

の中心になっている入植2代目ないし3代目の彼らにとって、自分の配偶者を得て新しい家族を創造することが、受け継いだ酪農経営を発展させていくことと共に重要な課題であったのであるが、そういう意味で親たちの世代とは異なる新しい家族や夫婦のあり方を作りだしていることが示されている。

第4に、根釧農業試験場の研究職員、共済組合の獣医師等、酪農ヘルパーが参加していることについては、まず労農学習会の時と比べれば地域にこれらの専門労働者が増加していることが条件になっている。農業試験研究機関と改良普及所は一体となって役割を果たしているが、いずれも合理化、人員削減の方向が基調となっており、農業改良助長法に基づく農業改良普及事業は、従来の農家を対象とする事業から農業者、農村を対象とする事業にかわり、改良普及所の名称も地域農業改良普及センターとなって広域化が進展しつつある。その過程で改良普及所は駐在所の廃止・非常駐化、試験研究機関は研究部門のスクラップアンドビルドが進んでいる。そのもとで農民との直接的結びつきが希薄になりつつあると言えよう。別海労農学習会も発足当時は改良普及員が大きな役割を果たしてきたのであるが、「新酪農村」建設等酪農政策にともなう技術普及・指導のあり方が厳しい対決にさらされる中で、中心となった普及員が配置転換されてからは、彼らの参加は見られなかった。試験研究機関の職員の参加は根釧酪農の大型化の矛盾が明らかになるなかで、彼ら自身が悩み、模索を開始していること、またとくに道や町の農政でもこれらに対する反省が起こっており、「マイペース酪農」が注目されるようになったことを背景にしている。獣医師の参加もこの地域で彼らの数が増加しているにもかかわらず大規模化の中で一人当たりの担当頭数が増え、治療から予防へという、乳牛の病気を直すだけではなく、病気をどうしたら出さなくなるかということに課題が変わ

りつつあることも背景となっている。酪農ヘルパーもとくに根釧では都府県出身の若い就農希望者が多く、農村での生活に憧れをもっている彼らは、「マイペース酪農」が生活を第一にしていることに魅力を感じており、一方彼らの交流会での積極的な発言や地域の様々な機会での活動がとくに同世代の酪農青年に農業をあらためて魅力のある職業として見直す契機を与えている。

V. ま と め

別海町のマイペース酪農交流会、そこに参加している酪農民の経営実践に示されていることは、今日の農業に社会的に問われている基本的な課題について包括的な示唆を与えるものとなっている。こうした実践が、酪農民の学習実践の積み重ねの中で生まれてきているのであり、また、試験研究機関の研究者、獣医師、酪農ヘルパー等の酪農関連専門労働者が積極的に関わる中で展開していることが重要である。家族経営を否定する農業政策の方向を批判的に克服して、農民的農業を発展させ、政策自体を改変する主体的力量の成長を示す北海道農業の未来を切り開く重要な実践と位置づけることができよう。さらに、生活を重視したその取組は、参加者の多面的な活動の契機となり、それは必然的に暮らしやすい地域、人間らしい生活のできる農業・農村地域を求める地域づくりの活動に発展していく方向性をもっていると言えよう。

(1996年5月23日受理)